

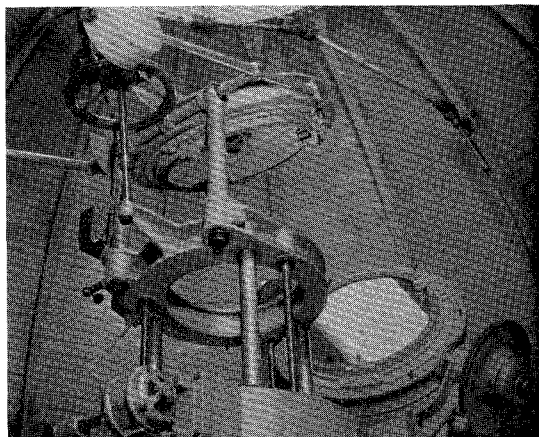
◇ 9月の天文暦 ◇

| 日時 | 記 | 事 |
|-------|----------------|---|
| 1 7 | 朔 | |
| 16 | 金星 東方最大離角 | |
| 5 11 | 土星 留 | |
| 8 11 | 白露 (太陽黄経 165°) | |
| 9 5 | 上弦 | |
| 13 3 | 水星 内合 | |
| 15 2 | 月 最近 | |
| 20 | 望 | |
| 21 14 | 水星 留 | |
| 22 19 | 下弦 | |
| 23 20 | 秋分 (太陽黄経 180°) | |
| 27 17 | 月 最速 | |
| 28 23 | 水星 西方最大離角 | |
| 30 24 | 朔 | |

東京天文台の塔望遠鏡

天文台の敷地の南端にそびえて立つ、橙色の化粧レンガに覆われた端正な塔望遠鏡の姿は、26呎ドーム、子午環等と共に大学卒業前後の私には東京天文台のアカデミズムの象徴として映った。高さ 15 m の塔の頂には直径 60 cm の大シーロスタット及補助鏡、直径、45 cm、集点距離 14 m の対物レンズ等が据えてあり、半地下の分光器室には大プリズム分光器と、集点距離 12 m の廻折格子分光器とがあり、既に建設後 10 数年を経ていた当時においても、世界屈指の太陽望遠鏡の一つであった。当時わが国では、天体物理学における太陽物理学の比重はきわめて重く、天体物理の分野での我々の多くの先輩は、大なり小なりこの望遠鏡に関係して居られたのである。しかし、折角ここで芽生えはじめていた黒点観測、分光測光等の仕事も、戦争のために数年間とだえ、ドームも一時雀の巢と化したことは甚だ残念なことであった。

戦後 2、3 年経つて観測資材がある程度入手できるようになってはじめてここでの仕事が再開される運びとなり、主として私がそれに当ることとなった。それ以来 10 数年の間、私は清水実君というきわめて有能な助手に助けられて塔望遠鏡にありとあらゆる荒療治を加えつつ研



究生活を送ることになったのである。お陰で 10 年前に気がついた時には、元来ツアイス製である塔望遠鏡で元のままなのは建物と、シーロスタットの機械部分と、いつまでもピンと来なかった auf とか zu とか書いてある取枠位で、他はすっかり日本光学製の全反射鏡系になってしまっていたのである。根が単純で、機械いじりが好きな私は、他の観測装置の様に組み立て上がったものでなく、いろいろな部品が只配列してあるだけという様なこの装置をあてがわれ、観測の計画、予算の都合に応じて、誰に遠慮することもなく、好きな様に乞食細工を楽しむことができることを心からしあわせに思っ

て暮らしていたものである。その後日食に熱をあげたり、岡山に太陽望遠鏡を作る計画が始まったりするにつれて私の気持は次第に塔望遠鏡から離れていったのであるが、私より若い人々がその後も数々の立派な業績を挙げて来られたことは衆知のことであろう。

今や太陽観測の主力は岡山に移り、更に乗鞍に新しい計画も進められている。そして往年の分光観測万能の時代は終ろうとし、流体力学的太陽物理学が今まさに誕生しようとしている。塔望遠鏡の一つの足がかりとして躍進した戦後の日本の太陽物理学が、今後余計な過去は振り切って新しい方向に力強く前進することを心から期待してこの稿を終りたい。(末元善三郎)

